



「立花宗茂と閻千代」物語

「こんな大河ドラマが見てみたい」〈第7話〉

■文：小山田桐子／挿：D&N ■イラスト：大久保ヤマト
※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。

【問】市観光課観光推進係（☎77・8563）

第二章

青年武将宗茂、九州の争乱で戦の才を発揮！一躍スターダムに！②

血で書いた辞世の句
父・紹運の壮絶な死

ようやく一つになった立花城。しかし、北上を開始した島津義久の大軍がひたひたと迫っていた！多勢に無勢。絶望的な状況の中、唯一の希望は関白となった豊臣秀吉だった。大友宗麟が秀吉に従うことを条件に、援軍の約束を取り付けていたのだ。

こたえれば勝機はある。宗茂は急ぎ、十時撰津を使いに出す。岩屋城より堅固な宝満城（実弟高橋紹運が守っていた）に移るよう進言。しかし、高橋紹運はその申し出をきっぱりと拒絶。「大友家から預かった城で自分は秀吉の援軍を待つ」と告げる。「もし、間に合わなければ、それは運命なのだ」と。紹運は岩屋城を取り囲んだ島津の猛攻にさらされながらも、反撃。鬼気迫る戦

いぶりで、島津に甚大なダメージを与える。その武勇を認めた島津が、和睦を求め、紹運はそれをほねつけた。家臣たちは誰ひとり投降しようとはしない。刀折れ、矢尽きながらも、3700人の敵兵を討ち、763名の家臣たちは残らず戦場に命を散らした。家臣一人ひとりに声をかけ、励まし、戦い続けた紹運。ついに、城が落ち、自らの命運が尽きたことを悟ると、自らが流す血で辞世の句を荒々しく書き残す。



1586年、九州平定を目指して北上する島津軍に対し、立花宗茂（左）と実父・高橋紹運（右上）は必死に抵抗した

「屍をば 岩屋の苔に埋みてぞ雲井の空に名を止むべき」
死後にその名を残すことを願う辞世の句だった。そして、敵兵の無遠慮な足音が迫る中、静かに櫓に上がった紹運は躊躇うことなく自害し、果てた。

～人物紹介～

宗茂を支えた正妻 立花閻千代（1569～1602）

1569年生まれ。父・戸次道雪よりわずか7歳で家督を譲られ、立花城（糟屋郡新宮町・福岡市東区）の城主となる。日本史上、城主となったことを史料で確認できる唯一の女城主である。真面目でプライドが高く男勝りな性格で、立派な城主になるため、銃の腕を磨き女子鉄砲隊を結成するなど、西国一の女丈夫と言われ、まさに戦う女城主だった。

父・道雪に後継者として認められた立花宗茂を婿に迎えることとなり、立花城に迫る危機の中で互いを認め合い、次第に戦友のような関係を築いていく。宗茂が側室を迎えると柳川城を出て、宮永にある居館にて別居を始める。別居後も、表向きは冷たい態度をとりつつも、陰から献身的にサポートし続けた。関ヶ原の合戦で敗軍の将となった宗茂の旧領復帰を、誰よりも強く信じていたが病に倒れる。閻千代は、肥後腹赤村（熊本県長洲町）で34歳にして永眠。閻千代の美貌に言い寄ってきた豊臣秀吉の呼び出しに武装をして向かったという逸話や、関ヶ原の合戦で柳川を侵攻してきた加藤清正が、閻千代が指揮する軍との衝突を避けるため侵攻ルートを変更したなど数々の伝説が遺されている。

柳川にこの人あり

vol.84



久留米商業高校女子剣道部キャプテン

徳永 璃子さん

藤吉・17歳

剣道団体戦で、高校初の全国大会出場

昨年12月に大川市で開かれた第28回全国高等学校選抜剣道大会県予選で、久留米商業高校女子剣道部の大将として出場した徳永さん。決勝では惜しくも敗れましたが、準優勝し3月に愛知県で開かれる全国大会への切符を手に入れました。全国大会出場は久留米商業高校女子剣道部創設以来初、また柳川市内の女子高校生が剣道の全国大会に出場することも10数年ぶりという快挙となりました。

小学1年生から、父が指導する藤吉道場で剣道を始めますが、中学時代は地区大会出場までと、目立つ選手でなかつ

た徳永さん。中学卒業後も剣道を続けたいと、久留米商業高校に入学。2年生の現在は、平日に練習、土日に対外試合と剣道漬けの毎日を送っています。

昨年7月、仲間から推薦され女子剣道部のキャプテンに。「監督が厳しいので、私はみんなのやる気が落ちないように気を配ります」と、ムードメーカーの徳永さん。今回の大会の決勝戦では、先鋒が負けた以外は副将まで引き分け。大将戦で徳永さんは相手と互角の戦いを見せましたが、一瞬の隙をつかれ惜しくも敗れました。悔しい思いをした徳永

さんですが、「これまで応援してくれた方たちに感謝の気持ちを持って、全国大会では悔いのない試合をしたい」と今まで以上に練習に力が入ります。

卒業後は警察官への進路を志望する徳永さん。部活だけでなく文武両道、勉学にも励んでいます。



県予選大会で準優勝した徳永さん（中央）と2年生の仲間たち

川柳

今月の入選作品・課題
「研ぐ」「新春雑詠」

拝む手の中に小さな夢がある

横山 保（徳益）

元朝。真新しい朝である。風も光りもそして鳥の声さえも昨日とは違う。さて今年はこのような年にするか。受け身だったこれまでの一年を少し能動的に、という決意。年齢とともにその夢はだんだん小さくなってきたけれど拝む手は熱い。

- 吐く息も研ぎ澄まされて射る 河口 学（白鳥）
- 目も耳も口も全てを研ぎすまし 野片義博（隅町）
- 鎌研ぐも畑では蝶と遊ぶ父 吉開綾子（筑紫町）
- ばんばんと夢で着膨れ初暦 山田美代子（下宮永）
- 丁寧に胚芽逃さぬ米を研ぐ 荒巻ミエノ（南浜武）
- 感謝して研ぐ新米の夕ご飯 古賀治美（南浜武）
- 新米を研ぐ母の背に春近し 阿津坂典代（矢留本町）
- 包丁に感謝を込めて研ぐ晦日 佐田輝喜（明野）
- あと幾度会える初日や米を研ぐ 古賀麗子（吉原）
- ハサミ研ぎ子どもの名札つけた頃 坂井幸利（中島）
- 平成の文字太く書く年賀状 甲斐田園一（吉富）
- 厳かに平成とじる年の明け 山口房子（白鳥）
- もち米を研いで年の瀬しみじみと 松本利香（古賀）
- 六度目にそっと爪研ぐ年男 津留和巳（六合）
- 研ぎ澄ます一瞬の透きシュートなり 井上勝世士（豊原）
- 新年は健康祈ることばかり 佐藤良子（蒲生）
- 白い息妹夢中で追いかける 江口優翔（藤吉小6年）
- おもちゃがねたべてたべてとまつている 溝上舜太（柳河小3年）
- 新年はわらってむかえるいきぶん 古川礼奈（柳河小3年）

川柳を募集しています。選句者は梅崎流書さん。1月の課題は「口」「雑詠」。入選作品は2月1日号に掲載します。

●応募方法 川柳と明記し、自作、未発表の作品（※1人3句以内）に、住所、氏名、電話番号を書いて、ハガキかファクスまたは直接、柳川庁舎企画課広報係（☎77・8425、FAX 74・5520）へ、1月15日（必着）までにお送りください。

いち日が終わる汚れた口拭う

流書